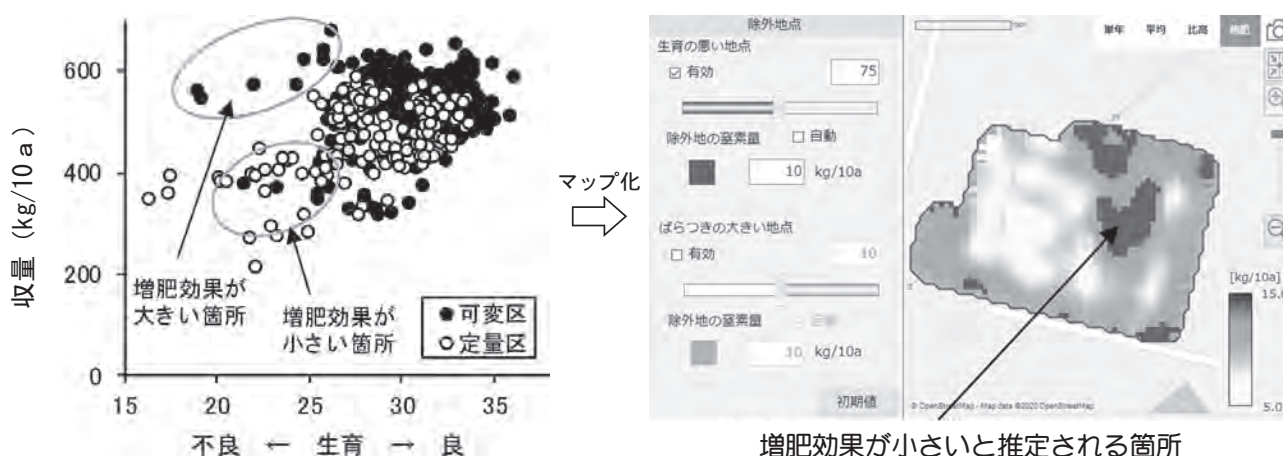


- (2) 可変施肥を実施した畑では、生育と収量の両方が悪い箇所を増肥効果が小さい箇所としてマップ化することで、翌年以降的確な増肥対応が可能になります。



畑の中における小麦追肥時の生育と収量の関係

増肥効果が小と推定されたエリアで増肥の有無を比較した結果

圃場		窒素施肥量		収量			
		有り	無し	有り	無し	百分比	
		(kg/10a)	(kg/10a)	(kg/10a)	(kg/10a)	(有/無)	
秋まき小麦	A 起生期	7.5	5.0	568	502	113	増肥が有効
	B 起生期	9.0	5.0	681	511	133	
	A 幼形期以降	8.0	6.0	510	508	100	増肥が無効
	B 幼形期以降	6.5	4.0	558	578	97	
てんさい	C 基肥	8.5	6.8	995	995	100	増肥が無効
ばれいしょ	C 着蕾期	6.0	4.0	4,165	4,177	100	

注) 収量は製品収量(小麦)、糖量(てんさい)、規格内収量(ばれいしょ)

注) 可変施肥不適箇所に排水不良箇所は含まない

3. 留意点

- (1) 畑毎の可変施肥適否判断を機器導入前にすることにより無駄な機械投資が抑制できます。
- (2) 畑の中の増肥適否マップを利用した可変施肥により、秋まき小麦の更なる増収と無駄な施肥量の削減を図ることができます。

(成績名：生育・収量・土壌センシング情報の活用による可変施肥効果の安定化)

もう少し詳しい情報はこちら
検索は、「農業技術情報広場、一般課題 R 1」で



本技術内容についての問い合わせ先
道総研十勝農業試験場
電話 (0155) 62-2431
E-mail: tokachi-agri@hro.or.jp